

平成 29 年度第 2 回
我孫子市いじめ防止対策委員会

日 時 平成 29 年 10 月 20 日（金曜日）
午後 3 時 00 分～午後 4 時 30 分

場 所 我孫子市教育委員会 大会議室

平成29年度 第2回いじめ防止対策委員会

平成29年10月20日（金）

我孫子市教育委員会大会議室

15:00～

1 開会（倉部議長）

2 会議の公開について（センター長）

- ・傍聴の諸注意説明

3 いじめ防止対策に関する報告および協議

(1) 第1回いじめについてのアンケート集計結果（センター長）

・いじめの認知件数は、小学校では7.5%、中学校では1.7%で、昨年度と比べて中学校での認知率が少しだけ高くなった。いじめの内容については、小中学校ともに「嫌なことを言われる」「無視」「仲間はずれ」が一定の割合で起きている。小学校では「物を隠されたり、盗られたり、壊されたりする」という間接的ないじめが多いのも特徴である。いじめの相談相手については、小学校では「親」へ相談する割合が一番高く、「友達」「先生」と続く。中学校では「友達」に相談する割合が一番高く、続いて「親」と「先生」が同率になっている。その一方で「誰にも相談していない」の割合が小中学校ともに高い。いじめた理由については、小学校では「いじめられた仕返し」「相手がいやがることをするから」「相手が自分勝手だから」などを正当な理由としている。「気晴らし」と回答している児童もいる。いじめられている子を認識しているのは、小学校8.2%、中学校1.8%であった。誰かがいじめられているのを見たとき、「黙って見ている」が小学校では18.3%、中学校では23.4%、「一緒に笑ったりからかっていたりしている」を含めると、昨年度比では増加傾向にある。

(2) 第1回いじめアンケート調査後の取組み状況調査結果

未解消事案についての報告。

(3) 第1回いじめアンケートの考察（センター長）

☆「問①いじめの認知数について」

・小学校では昨年度ピークに今年度はやや減少したが7.5%と高い。文部科学省より、平成26年には「いじめの認知に関する考え方」が示された。いじめは発生するものなのだから、各学校・教師は見ても見ぬ振りをするのではなく、評価を恐れることなく積極的に認知できるよう、児童・生徒の言動をしっかりと見据えることと通知している。

・現在、「いじめはどの学校でも起きる」という認識の下に、全職員で共通理解しながら指導に当たっている。「たくさん認知して、たくさん解決する」という姿勢により、大きないじめに発展していないと考えている。学校は、子どもが「いじめられた」と訴えてきた場合には、臆せずいじめと判断し、対応できるようになっている。また子どもがいじめられていると感じたときは、正直に訴えられるような環境ができつつある。

・小学校では軽微な事案が多く、つい悪ふざけで相手を傷つけることを言ってしまうたり、ちょっかいを出してしまったりする場合はほとんどで、指導後は普通に生活できている。

・「いじめ」と「悪ふざけ」の線引きに明確な定義はないが、次のような場合は悪ふざけの線を越えている。

- * 「反復性」：嫌がることを反復して行っている
- * 「同一集団性」：いつも特定の同一集団内で起こっている。
- * 「立場が対等でない」：行為者にあきらかな優位性がある。
- * 「故意である」：嫌がっていることを分かった上で行っている。
- * 「傍観者がいる」：1対1でなく、周りに傍観者がいる。

しっかりと見極めることが重要である。

- ・ 文部科学省の定義によれば、いじめとは、「当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているもの」……つまり行為を受ける側の気持ちやとらえ方が大切だということ。たとえ行為が悪ふざけのつもりでやっていたことでも、その行為を受けた人が「精神的に辛かった」と言えば、それは「いじめ」ということになる。
- ・ 子ども自身が自覚していなくても、知らず知らずのうちにいじめの加害者になっている可能性もある。「人の気持ちを想像すること」「相手の立場に立って考えること」の大切さを毅然とした態度で教えていかななくてはならない。小学校の低・中学年の時に「小さなケンカ」をたくさん経験させることも大切である。

☆「問②誰に相談しましたかについて」

- ・ 「誰にも相談していない」の割合が、小学校 26.5%、中学校 19%と、ともに高いことがわかった。「親や教師に話せばいじめがさらにエスカレートするのではないか」、さらに自分がいじめの被害者であることを認めることは、プライドが傷つくと考え、あえて親や教師には言わずに一人で耐えるケースも少なくない。
- ・ 教師と子どもの人間関係を円滑にし、「何でも話せる人間関係づくり」を育み、学校全体で必要な情報を共有し、いじめ防止に取り組む必要がある。同時に教師は授業だけでなく、積極的に休み時間や放課後の教室の様子を観察し、教室内で起こっていることを正確に把握するよう努めることが大切である。
- ・ 今年度は、[いじめのサイン 学校編・家庭編]を活用するよう学校に周知した。19校中15校が実施したと回答しており、職員研修や保護者会資料として活用している。

☆「問③誰かをいじめてますかについて」

- ・ いじめをしている子の中で、いじめと認識している場合と無意識の場合がある。意識している中でも「相手が自分勝手だから」とか「いじめられた仕返し」などそれなりの理由がある場合と、「気晴らし」とか「楽しいから」など、理由というより単なる感情で行っている場合がある。
- ・ 「ただムカついただけ。誰でもいいからなぐりたかった」という言葉の背景には、その子の置かれている環境の問題や栄養状態、心理的な障害などが潜んでいる可能性があり、この問題が解決されればいじめ行為も自然となくなるケースが多くある。加害者に寄り添った対応をする必要がある。

☆「問4いじめられている子がいるとき、あなたはどうしますかについて」

- ・ 「黙って見ている」「一緒にからかったりしている」を含めると、小学校、中学校ともに増加傾向にある。
- ・ 「黙って見ているのもいじめの加害者と同じ」と指摘する意見もあるが、それは正論とも言えない。なぜなら傍観者にもいろいろなタイプがあるからである。「面白がって見ているだ

け」という子もいれば、「本当は止めさせたいけど、怖くてできない」という子、「自分には関係ない」と、全く他人事のように考える子もいる。教師は傍観者のタイプに応じた指導をする必要がある。

- ・小学校では、いじめられている仲間が身近にいることを知り、勇気を出してやめるように言っているたくましい児童が多くいる。自分のこととして痛みを覚えたり罪悪感を持ったりすることは、心の教育として重要なことだと考える。「自分さえよければいい」ではなく「皆が幸せになれる教育」を推進していきたい。

☆「問⑤いじめの事案について」

- ・未解消の事案について、認知後そのほとんどが解消していることは、全ての事案の特定と迅速で丁寧な対応がおこなわれた成果である。現在のところ未解消事案は4件であり、経過観察をしている。

☆「⑥まとめについて」

- ・いじめ問題は、一人で悩んでいる場合が少なくない。そのため今後も、個人面談、日記・生活ノート等を通した直接的な指導をはじめとして、学校生活での様子観察、いじめチェックシートの活用、保護者との連携など、アンテナを高くして生徒の様子を見守っていくことが重要である。

<思いやり教育のすすめ>

- ・教育の現場において、いじめ防止のために「思いやり教育」の必要性が叫ばれている。思いやりとは何か？辞書によれば、「他人の身の上や心情の心を配ること」とある。自己中心的で自分の事ばかり考えているのでは思いやりは生まれない。
- ・思いやりを教えたいのであれば、まずはその子に思いやりを与えることが大切になる。言葉でどんなに説明しても身につかない。思いやり教育を積み重ねていくことは、世の中や人間に対する見方を大きく変えてくれる。子ども達の一番近い場所にいる教師や親こそ、その役割を果たさなければならない。

<教育の基礎は「信頼関係」>

- ・どんな正論を掲げても、そこに信頼関係がなければ、人は話に耳を傾けない。教師は信頼関係を重視しなければならない。
- ・いじめ加害者にとっても被害者にとっても「教師を信頼できるかどうか」というのは非常に重要な意味を持っている。
- ・いじめを予防する為の基本は学級を楽しくすることにある。学級が楽しければ、いじめは生まれにくくなる。「Q-U検査」などを適切に活用し、いじめ防止に取り組みたい。

○議 長：「第1回いじめアンケート集計結果」と「アンケート調査後の取組み状況および考察について」の報告があったが、これについて何かご意見ご質問があればお願いしたい。

*栗原委員：いじめアンケートで、「場所はどこですか？」があるが、活動場所など具体的な場所の項目はないか？

*センター長：場所については、「教室以外の部屋」「その他」というくくりになる。

*栗原委員：中学校では部活動内でいじめ問題があるようなので、「学校の行き帰り」も含めて、場所に着いて深く掘り下げて調査すると思う。

*櫻井委員：アンケート結果の男女の比率はどうなっているのか？

*センター長：小学校では男子278件、女子では203件。中学校では男子28件、女子25件。
小学校では男子が多く、中学校では同じくらい。正確に割合は出していないので、後ほど算出する。

*久米委員：冊子に、学年別、男女別の集計結果が載っている。学年による違いなど詳しく調べてあり参考になった。

(4) 各学校における具体的な取組みについて(少年センター長)

- ・資料の★印の「児童・生徒の主体的な活動」を中心に報告する。道徳や学級指導などを通して「友達の良いところ」を帰りの会で発表している学級や「ゴメンねタイム」を設定し、良くなかった言動を謝る時間を設定している学級もあった。児童会や生徒会が中心になり、挨拶キャンペーンを実施し、明るい雰囲気作りに取り組んだ学校があった。全校集会で、児童会役員が中心となり、「いじめ防止の寸劇」を計画し、チクチク言葉を取り上げた劇を実施したり、マスコットキャラクターを作りいじめ防止に取り組んだりした学校があった。また、児童会を中心に「命を考える月間」として集会で命の大切さを訴えたり、放送委員会が中心となり、友達の頑張っている姿などを紹介したりする学校があった。次に、具体的な取組みの紹介をする。
- 取組みについて(佐藤指導主事)
 - ・まず、小学校の取組み。アンケート調査をきっかけに、校長先生がいじめ問題を児童会に投げかけた。児童会は、2学期始業式で「いじめを学校からなくす」ことを取り組んでいくと全校生徒に発表した。
 - ・児童会主催の「いじめなくそう会議」を何回か開催し、9月21日の会議では、各学級で考えてきた「いじめ6箇条」を発表し合った。それを受けて、7箇条にする提案をし、7つのグループに分けて、グループごとに1つのテーマについて考えてくることにした。今後の話し合いのまとめが楽しみである。(写真による報告あり)
 - ・中学校の取組みを報告する。6月中旬に教師主導型で、学級指導的な集会で、いじめ問題を取り上げた。日常生活で嫌だと感じた言葉や行動を発表し合い、いじめをなくすためのスローガンを考えて用紙に書き、皆の前で発表した。それを「私たちの行動宣言」として、各学級前廊下に掲示した。生徒達は、他のクラスの掲示物を見に行き来し、意識が高まったようである。
 - ・今後は、生徒主体の活動に移行するとともに、全校に広げていきたいと考えている。

(5) 「中学生と教育委員の懇談会」(少年センター長)

- ・8月3日に布佐中学校で、各中学の代表と教育委員で開催された。子ども議会が2年に1回開催されているが、もっと子どもの考えを直接聞きたいということで、企画実施された。
- ・各学校の取組みでは、①いじめをなくすためのスローガンを作り、廊下に掲示して、いじめについて考えていく取組み。②タイトル「つながり」の新聞発行。③ネットでのいじめ問題を全校集会で呼びかけ。④「よい環境で人は育つ」と美化委員が呼びかけ、掃除の取組みを見直す。⑤授業改善に着目し、机を班隊形にし、考えを発表し合う機会を増やすことで親近感を育てていくなどが報告された。

- ・いじめアンケートでは、「書いている人は少ないのでは…」「書いているといじめられているのがわかってしまう」などの意見があり、実施方法については検討する必要があると感じている。
- ・いじめアンケート以外の取組みについては、「教育相談がよい。先生一人に対して生徒一人なので言いやすい」という意見が出された。また、「周りが気づいてあげることが大切だと思う。いじめに対する関心が高まれば、いじめを見ている人は書く勇気も出てくると思うので、いじめに対する関心が高まるような活動ができれば良い」という意見もあった。
- ・いじめゼロについては、いじめはなくなるという前提にたてば、各校では、ア「どうしたら少なくすることができるか」、あるいは、イ「いじめはゼロにするという方法をとる」のか、どちらの方法をとりたかについて意見を出し合った。「いじめを少なくしていきながら、いずれはゼロになったらいいと思う」や「ゼロにするのは難しくても、トラブルを一つひとつ解消していけばゼロに近くなる」などの意見が出され、生徒達の前向きな姿勢を強く感じた。

(6) 「いじめ防止のための「ピア・サポート」の活用 (少年センター長)

- ・千葉県では、豊かな人間関係作り実践プログラムとして活用している。ピア・サポートとは「仲間や友達同士が、お互いに支え合い、助け合う」ことである。
- ・「他者への思いやり」がなければ、仲間を助けることはできない。人を思いやるためには、「自分も思いやられている」とうい実感が必要不可欠である。
- ・奈良教育大学の教授が「いじめの最大の防御は、子ども相互の人間関係の形成と良質なコミュニケーションの育成を図ることだ。その意味で「ピア・サポート」活動の導入は非常に重要だと主張している。
- ・指導計画として、年間4時間の計画となっている。冊子に、小学校、P 32～33に中学校の例を載せてある。

4 意見交換

○議 長：ここまでの報告等にご意見ご質問があれば、お願いしたい。

- ・「中学生と教育委員との懇談会」の実施については、子どもの考えを直接聞きたいという願いがあり、今年度開催されたが、生徒さんとより近い距離で話し合う場となり、良い時間だったと思う。中にはかなり具体的な内容まで話し出す生徒もいた。「アンケートに長く書いていると、いろいろ気づかれてしまうと感じ、本当のことを書けないこともあるのでは…」という意見があった。アンケートの内容、どこで行うか？いつ？などを考え、第2回目のアンケートに生かしていきたい。
- ・まず、アンケートについては、質問の内容や数などいろいろ改善点があると思うが、いじめを発見する第一歩としての意味合いがある。先生が普段の授業・生活を通して気づくのが一番であるし、子どもが言ってくれたら早く対応できるので、増えて欲しいと思う。アンケート以外にもQ-U検査を行うなどいろいろなもので何とか早くサインを発見し、「いじめがある」という立場で対応していきたい。調査では重大事態としての事案はないが、完全になくなっていない事案もあり、継続して見守ってい

く必要がある。

***久米委員**：「アンケートの集計」について、学年別とか男女別の集計など、どのようになされているのか？ いじめがある場合、全校であるのか学年であるのか、また男子で多いのか女子ではどうなのか…などわかると、先生方の緊迫感も違うのではないかと。

○センター長：アンケート集計に関しては、学級での認知数、男女別など担任が一人一人確認して、まとめている。一言書く欄に「楽しくない」と回答があれば、「どうして？」と問いかけ、「実は書けなかったけれどいじめられている…」と発見できることもある。集計においては、まず、学年主任が把握し、次に、生徒指導主任が全体を把握し、最後に、教育委員会に報告がある。

***久米委員**：細かく集計されていて安心した。いじめ問題は「ゼロ」の世界は難しいと思っている。いろいろな形があり、受け取る方がいじめと考えればいじめになるわけだから、継続して見守っているという体制はよいと思う。

***村田委員**：中学校の集計に、殴る・蹴るなどの暴力行為の数字は少ないが、実態としてどうかという思いがある。自分の経験から、中学生になると身体も大きくなり、人間関係も複雑になっていく中で、周りに知られたくない気持ちやネットでのいじめなど多様さがあると思う。この数字を見ると我孫子市の生徒はおとなしくて、いじめは少ないととれるが、実態としてはどうとらえているのか教えて欲しい。

***佐藤主事**：このアンケートの他にQ-U検査を行っており、アンケートで答えきれなかった実態を把握している。検査項目には、「無視されることがある」「からかわれ馬鹿にされる」「悪ふざけをされる」「一人でいることが多い」「学校に行きたくないときがある」などがある。短時間で記入でき、周囲に気づかれずに行える。その結果データを元に、いじめが心配される児童・生徒をリストアップして各校に聞き取りに行く事で、実態に近づけるのではと考えている。

○センター長：現在行っているいじめアンケートは、いじめ発見のひとつの手段としてとらえている。数字的には実態と比べ低いと捉えている。アンケートで答えられない子や傍観者もいるので、このアンケートだけでなく、Q-U検査をはじめ、日々の生活や授業、生活ノート、教育相談など様々な手段を用いて実態を把握する努力をしている。

○議 長：教育委員会としても、アンケート結果と実態では誤差があり、実態が反映されているとは捉えていない。「言いたくても言えない」…という状況を、大人が拾っていくことが大切だと考える。アンケートでは、中学生は小学生より本音を書かない傾向にある。ネット上の問題も見えづらいことが課題であるが、把握できたことは学校と教育委員会が連携し、解決にあたり「削除」したケースもある。以前は、サイト管理者は応じてくれなかったが、最近はきちんと手を打てば不適切な内容は削除できるようになってきている。「言いたくても言えない子」…そういう子が書いてくれるようなアンケートであると良いと思う。

***櫻井委員**：先ほどあった「小さなけんかをたくさん経験させることも大切である」と書いてあるが、その意味合いは？

○センター長：例えば、ケンカしたことがない子が、加減を知らず相手を殺してしまったということを考えてみてほしい。「相手がどのくらい困る」のかを身に付けておく必要がある。

る。怪我とか重大事態になる前に、ちょっとした言い争いなどの経験を通し、免疫力を身に付けて欲しいと考えている。

***佐藤委員：**アンケート分析では、クラス別や男女別で、細かくされているという報告であったが「いじめられた」と「いじめがある」の数字が合うということが大切ではないか。理想を言うと、いじめが一件あったら、クラス全員が知っていて欲しいと思う。陰で隠れたいじめは仕方ないが、皆にわかるような状況のいじめは、「いじめがある」ことを全員が知っていて、報告して欲しいと思う。「教育委員との懇談会」の取組みで、参加している生徒さんはどのような生徒なのか？

○センター長：「生徒会役員」だと限られてしまうので、「学校代表2名」という表現で選考を依頼した。当日行ってみたら、教育長が「あなたを知っている」「あなたも知っている」という会話が聞こえ、生徒会役員と重なっている学校もあったようだ。

***佐藤委員：**生徒会の子とか問題意識の高い子の意見が学級を代表した意見かどうか。つまり意識の低い子・傍観者・私はよく知らない…という子をなくし、「いじめを考えていない子はいない」という状況であって欲しい。

○議 長：今回は、知っている生徒だからこそ本音を語ってくれたという側面もあったと思う。

***久米委員：**ネットやメールでの問題があると思う。私たちが使えない機能を子ども達は使っている。以前は誰から電話がかかってきたのかわかったが、今はどんな相手とどんな内容を話しているかわからない。見えないところでのいじめが難しい課題だと思う。アンケート結果では少ない感じがする。メールやネットでいじめがあったのは小学校で2件、中学校で3件ですが、きっと現実はこの数字ではないと思う。教師や親が気づかないところでのいじめをどこまで気づけるのか。私の受け持っている生徒の間でも「そんなところでのいじめが起こっているの？」と驚いている。他のグループでは知らないという現状であり、現れていない問題をどう把握できるかが一つの課題であると思う。

***栗原委員：**ネットやメール、「LINE」という言葉を使ってのアンケート質問をしてみたらいいのではないか。また「傍観者の多さ」への指導が必要であり、課題を絞って、学校で指導してもらえると良いと思う。

○議 長：いじめの解消では、傍観者をなくすことが一番大切ではないかと考えている。起きたことへの指導だけではダメで、「どう導いていくか」を授業や学校生活、家庭との協力など、傍観者にならないためのかわりが必要だと思う。

***鈴木委員：**学校の強みと弱みを考えてみると、「予防」の部分は、学校の得意としていることで、教育そのものに直結しており充実しているところだと思う。日々の様子の把握、アンケート、教育相談、言動など気づきやすい位置にいる。しかし、実際の捜査という面では弱く、警察の能力が高い。学校でできることは被害を受けた子のケアに取り組むことである。現実には教育に無関心の家庭もあり、市の関係機関の力を借りることで解決することも多くあり、今後も協力体制を作っていければと思う。

***齋藤委員：**いじめの理由で、「気晴らし」「楽しいから」「むかついたから」が気にかかる。DV相談が増加している現状もあり、貧困家庭と結びつくものもある。学校だけではなく、家族関係が重要で、根であると思う。関係機関の関わりなど多方面で関わってい

くことが大切だと思う。

***三澤委員：**早期発見がとても大切。いかに「ゼロ」に近づけるかの観点で、「探す」「見つける」「気づく」のポイントを意識していく事が大切ではないか。

学校での休み時間、食事の観察や、家庭で虐待があるかどうか…というある意味「疑いの目」を持つことも手立ての一つだと思う。

***小島委員：**アンケート結果については、ここ数年で大きな変化は見られないが、細かく分析していくことが大切。去年、2年生が多く、今年、3年生が増えていけば学年の課題として見ていくことが重要だと思う。未解消事案がなくなることも重要。学校独自のアンケートを実施している学校もあり、ゼロにする取組みなど本日の提案にあったように各校で取り組んで欲しい。ピア・サポートなどを通して授業で思いやりの心をどう持たせるか難しい課題だが、多くの目で関わって欲しいと思う。

○議長：気にかかることとして、不登校の子の増加がある。原因として、家庭の問題もあると思う。子どもは大人社会の縮図だと感じることが多い。子どもの取り巻く環境が変わっていくなど、いじめの様々な課題が見えてきた。我孫子市では行政の関わりも丁寧で、すぐに関わってくれている。子どもをどのように指導していくかを柱に、それを持ち続け、「個別」と「全体」を見ていきたいと思う。

5 その他

6 諸連絡 センター長

・次回 第3回いじめ防止対策委員会 2月20日(火) 15時～教育委員会大会議室

7 閉会